

 健康な体 誠実な心 豊かな知性	しのめ 	尾張旭市立東中学校 学校だより 令和3年度 第8号
感染症は信じられないくらいの落ち着きに。でも油断は禁物。しっかり手洗いを継続し、インフルエンザの予防も		

「勝つだの負けるだのは 窮極 問題にしてねえんだ」

この言葉は、マンガ『あしたのジョー』の中での、ボクシングトレーナー丹下段平の言葉。世界一のボクサーホセ・メンドーサとの決戦を前にした主人公である矢吹ジョーの心の内を語っています。ジョーにとっては力の限りを尽くすことこそが大事で、勝ち負けはその結果にすぎないことを表している言葉です。

体育祭が終わってもう2週間が経ちますが、思い起こせばきっと、皆の中に刻まれたもの、見つけたかけがえのない「宝物」が浮かび上がってくるはず。発行された学級だよりなどから、幾つか拾い集めてみました。「みんなの応援、涙が出るくらいうれしかった」「みんなが全力で取り組めたことが一番」「代わりに走った〇〇くん、ありがとう」「負けたことを責めることが一切ないこのクラスが大好き」「最後まで大縄を回してくれた子、ありがとう！」「バトンパス失敗、綱引き全敗だったけど楽しかった。みんなで次は勝とうとがんばった」「2・3年生を応援している時、手が赤くなるほど拍手した ※」「勝ったことや負けたことより、クラスひとつにまとまって跳べたからうれしかった」「走順を間違えて失格(?)だったけど、みんながんばったから楽しかった」……などなど枚挙にいとまがありません。



また、特別支援学級の子たちは、日ごろの交流クラスにはいつて競技に参加しました。彼らを仲間として競技の中で支えるクラスの姿がありました。大縄跳びでは、跳び方をアドバイスし、ずっと一緒にリズムをとりながら跳んだ子。全員リレーでは、転ばないように注意を払いながらリードし、一緒に走った子たち。彼らを支えるクラスの子たちの姿も、それに応えてがんばる特別支援学級の子たちの姿も「宝物」でした。

これらのことはすべて勝ち負けを超越したところにあるものであり、かけがえのないものにちがいありません。きっと、どのクラスにもすてきな「宝物」が見つかった体育祭だったと思います。それは、皆が普段の「日常」をクラスでしっかりつくりあげてきたから。その「日常」があったからこそこの体育祭でした。体育祭の最後に各学年の上位クラスの表彰をしましたが、それ以上の表彰を全学年全クラスに…と思った体育祭でした。〈校長〉

※ クラス別縦割り対抗であるかのように学年を超えた応援が見られましたが、縦割り対抗ではありません。全力を尽くす姿に学年を超えて応援できるすてきな子たちです。

まだまだ見つかった「宝物」



競技以外にも「宝物」はたくさん見つかりました。感染症対策に協力していただいた保護者の皆さん。中庭に自転車を整然と並べていただいた保護者の皆さんも。また、体育祭中のトイレとして使用した体育館や錬心館のトイレのスリッパを、自分が使ったものはもちろん、友達の分までささっとそろえる子たち。閉会式後、椅子の足についた砂や土を昇降口で落とす際、他学年の子たちの椅子までせつせと拭いた3年生の子たち。そして、体育祭の計画から当日の指揮・運営まで、すべての中心となってきた体育主任の丸山先生に、内緒で「表彰状」をつくっていたクラスの子たち。きっと、他にもザクザクあったと思います。見つかったすべての「宝物」が、次にくる文化祭、合唱祭に、そして再び「日常」につながっていきます。

10月末をもってあさひ安全安心メールから完全に保護者アプリに切り替わります。学校からの紙の文書は極力減らしていくことになります。ご理解いただきますようお願いいたします。

愛知県のPTA新聞10月号に東中PTA広報生活部の松村亜矢子さんの寄稿文が掲載されました。とても心に残るよいお話ですので、ご本人の許可を得て、改めて学校だよりでも紹介させていただきます。

一番の応援団長

松村 亜矢子

この春、我が家に大きな変化があった。下の子の保育園入園をきっかけに、私が十数年ぶりに外へ働きに出たのだ。いざ働き出したら、朝の身支度は本当に忙しく、バタバタした時間を過ごしている。それでも長男が小学校に入学して以来、毎朝欠かさないことがある。小さなことではあるけれど、子どもたちが家を出る前に必ず握手をし、姿が見えなくなるまで見送る。心の中で今日も楽しい一日でありますように、良いことがたくさんありますようにと声援を送ってきた。忙しい時間帯だけれど、これだけは欠かさなかった。そのお陰もあってか、子どもたちは毎日明るく元気に登校してくれている。

そうした中で迎えた夏休み。子どもたちだけを置いて、出掛けることがなかった我が家。大丈夫かなあと心配だったけれど、兄姉弟、力を合わせれば何とかなるだろうと、留守を任せて働かせてもらうことにした。そこで気が付いた。今まで「いってらっしゃい」「お帰り」と言っていた私が、子どもたちから「いってらっしゃい」「お帰り」と言われる。「今週はいつ仕事？」「今日は？」と毎日聞いてくれるのが嬉しかった。疲れて帰ってきた時も、声を掛けられるとホッと安心できた。

私は常に子どもたちの一番の応援団長でありたいと思っている。やりたいことは極力やらせてあげたい。力になりたい。味方でありたいと思っている。それが今では4人の子どもたちから、応援され元気をもらっている。一番の応援団長のつもりが、一番応援されていることに気が付いた。子どもたちの何気ない一言が、その日の活力となっている。それを思うと、やはり朝の見送り、心からの声援はやめられない。私が力をもらっているように、私も子どもたちに力を与えられる存在でいたい。これからも手を止め、見えなくなるまで見送りたいと思う。



お子さんたちに「愛情貯金」がたまっているんだらうなと思いました。お金がたまっていると安心して生活ができるように、「愛情貯金」がたまっていると、無意識のうちに、わたしは守られている、認められているから大丈夫と想着て、心の安心感が得られるのではないでしょう。だから、松村家のお子さんたちは、少しいやなことや辛いことがあっても、しなやかで強く、そして、明るく元気に過ごすことができののだらうと思います。そういうば、わたしも朝、妻に見送られるとちよっぴりうれしくて安心しますね。

教頭

